

停車場

作
少年
ユキオ

登場人物

セールスマン
少女
母親
女将
駅長
男
男
社長
女衛
手下

雨の音、大雨らしい。

やまない雨。

古びた駅舎の待合室、いくつかベンチが置かれている。

待合室の奥は改札口、上手側には切符売り場。

コートに山高帽、両手に大きな旅行鞆とタイプライターを持ったセールスマンが登場。

ベンチに荷物を置き、濡れたタイプライターをハンカチで丁寧にふき取る。

少ししてから、思い出したように切符売り場に向かう。

売り場の中を覗き込む、誰もいない様子。

軽く声をかけてみる。

セールスマン ごめんください……。 (応答なし。) ごめんください、誰かいませんか……?
ごめんください……。 (応答なし。)

仕方なくベンチに戻る。

改札口の方から、駅員らしき男やって来る。しかし、セールスマンに気付いた

男は改札口へ戻ろうとする。

セールスマン あっ、あのちよつと……!!

男 (足を止めて。) 僕ですか?

セールスマン ああ、良かった、誰もいないのかと思ったよ。駅員さん、あの……。

男 違いますよ。

セールスマン えっ?

男 違うんです。

セールスマン 違うって?

男 人違いだと思います……。

セールスマン 人違い?

男 たぶん、あなたが思ってる人とは違うと思うんです……。

セールスマン 何が言いたいんだ?

男 だから、あなたが思ってる人とは違うんです……。

セールスマン 駅員じゃないのか?!

男 はつきりとは言えませんが……。

セールスマン はつきりと言えないって……、それ、駅員の制服じゃないのか?

男 もちろん駅員の制服です。

セールスマン なら、君は駅員じゃないか。紛らわしいことを言うから違うのかと思ったよ……。

男 あなたは見た目で人を判断するんですね。でもそれは危険ですよ、僕が駅員の制服を着ているからと言って、駅員である保証はどこにもありません……。

セールスマン じゃあ、やっぱり駅員じゃないのか？

男 はっきりとは言えません。

セールスマン はっきりしろよ……！ああ、もういいよ。他に駅員はいないのか？

男 たぶん、今この駅には僕とあなたしかいません。

セールスマン 駅員じゃないのに呼び止めて悪かったな、もう行ってくれ……。

男 誰が駅員じゃないなんて言いました、はっきりとは言えないって言っただけです……。

セールスマン じゃあ、はっきりと言ってくれるんだな？私は駅員に用があるんだ……。

男 駅員にどんな用があるんです？

セールスマン それは君が駅員だった場合に話すよ……。

男 何ですか？それは僕が駅員かそうでないかを決めるってことですか？

セールスマン 当り前じゃないか！私に君が駅員かどうかなんて分かるはずないだろ。

男 僕が決めるとして、駅員じゃないって言ったなら、あなた困るでしょ？

セールスマン そりゃ困るけど……。

男 だったらあなたが決めてください。

セールスマン 私が……？！だから分からないって言ってるじゃないか、君は自分のこと

なんだからわかってるんだろ？

男 もちろん分かっています、自分のことですから……。でも、駅員に用があるのはあなた

ですから、あなたが決めるべきです。

セールスマン でも、もし私が君は駅員でないと決めたら、どうなるんだ……？

男 僕は駅員でないと言うことになります……。

セールスマン 君は、それでもいいのか？

男 駅員でない方に決めたんですね。

セールスマン いや、そうじゃない、まだ決めたわけじゃないんだ。もし、駅員でない方に

決めたら困るんだろ……？

男 それは、もちろん困ることになると思います。でも、あなたが決めることですから遠慮

なくお願いします。

セールスマン だったら、君が駅員の方で……。

男 いいんですか？そんなに簡単に決めて

セールスマン えっ……？君が決めるって言うから決めたんじゃないか……。

男 もし、僕が駅員じゃなかったらどうするんです……？本当は駅員じゃないのに、あな

たが僕を駅員にしてしまうんですよ、それでもいいんですか……？

セールスマン 何を言ってるんだ？君は……。私が駅員だって決めただから、君は駅員じゃないのか？

男 そうです、あなたが駅員だって決めたのなら、僕は間違いなく駅員です。でも、それと僕が本当は駅員なのか、本当は駅員じゃないのかはまた別の話です。本当は駅員じゃないかもしれないのに、僕を駅員にしてしまったっていいんですね？

セールスマン ちよつと待ってくれ……。！まだ、頭の中が整理できていないんだ……。私はいったいどうしたらいいんだ？

男 だからそれをあなたが決めるんです……。

セールスマン もし、本当は駅員じゃないのに君を駅員に決めてしまったら、私はどうなるんだ？

男 あなたは、本当は駅員じゃない僕に用件を伝えることになるんです。

セールスマン そうなると、私はどう言うことになるんだ？

男 本当は駅員じゃない僕は、出鱈目なことを言っただけを騙そうとするかもしれないかもしれません……。

セールスマン 私を騙す……。？君は私を騙すつもりなのか？！

男 そうじゃありません、それは仮に、僕が本当は駅員じゃないのに、あなたが駅員と決めた場合の話です……。

セールスマン 分かった。だったら、君が駅員じゃない方にしよう。

男 僕は駅員じゃない、それで本当がいいんですね……？

セールスマン ちよつと待ってくれ……。！君が駅員じゃなかったら、私は誰に用件を言えればいいんだ？

男 駅員に言えばいいんですよ。僕が駅員じゃなかったら他に駅員がいるはずですから。

セールスマン その駅員と言うのは何処にいるんだ？

男 この駅のどこかにいるはずですよ……。

男、立ち去ろうとする。

セールスマン おい！どこに行くんだ……？

男 僕は駅員じゃありませんから……。、失礼します。

セールスマン 待てよ……。！取り消した、君が駅員じゃないと言うのは取り消す。だからもう少し考えさせてくれないか？

男 いいですよ……。

セールスマン、待合室を歩き回る。時にはベンチに座ったり、立ち上がってまた歩いたり。そして、意を決して駅員の前で立ち止まる。

男 決まりましたか？

セールスマン ああ、決めたよ……。

男 もう取り消せませんが、いいですね？

セールスマン えっ……？ああ、いいとも……。

男 僕は駅員ですか？ 駅員ではないですか……？どっちにします？

セールスマン 君は駅員だ！間違いない……。

男 (クスツツと笑う)……。

セールスマン 何が可笑しい？

男 ずいぶん力がこもっていたので、つい……。

セールスマン 君が取り消しできないって言うから、緊張して力が入ったんじゃないか……。

男 そうでした、申し訳ありません……。でも、あなたは僕が駅員だと言う方を選んだので、僕は駅員です、ご用件をお伺いします。

セールスマン そうか、じゃ、東京までの切符をお願いしますんだが。

男 ……。

セールスマン どうしたんだ？

男 僕は駅員ですけど、切符の係じゃありません。

セールスマン だから何だと言うんだ？

男 切符の係じゃない者は、切符の用件を聞くことができないんです……。

セールスマン じゃ、切符の係は何処にいるんだ？

男 切符の係は切符売り場にいるはずですよ。

セールスマン 切符売り場には誰もいないよ、だから駅員を探してたんじゃないか……。

男、切符売り場のガラス越しに中を覗き込む。

男 でも、僕は切符の係じゃありませんから……。

セールスマン 君は何の係なんだ？

男 僕はホームの係です。掃除をしたり、記者の発着を知らせたりしてます、でも切符を売ったりはしません……。

セールスマン じゃ、私はどうやって切符を買えばいいんだ？

男 切符の係が戻るのを待つしかありません。

セールスマン いつ戻るんだ？その切符の係と言うのは。

男 さあ、僕は切符の係じゃないので……、何とも……。

セールスマン 君はわたしを馬鹿にしてるのか……？切符の係がいない間に汽車が来てしまったらどうするんだ……？！君が何とかしなさい！

男 そんなこと言われても……。

セールスマン ホームの係も切符の係も同じ駅員じゃないか、君が切符を売ること何の

問題があるんだ・・・？

男 でも、それが駅の決まりですから・・・。

セールスマン 分かった、もういい！君が切符を売れないなら、切符の係を待つことにする。もう行っていいよ・・・。

セールスマン、ふてくされてベンチに座る。

男 誰が切符を売れないと言いました？

セールスマン 今言ったじゃないか！切符の係じゃないから売れないって。

男 そうです、僕はホームの係で切符の係じゃないから切符は売れません、でも切符くらいは売れるんです。

セールスマン 決まりがあるんじゃないのか？

男 はい、決まりは守らなくてはいいけません。だから、僕が切符の係になればいいんです。

切符の係になって切符を売れば、決まりを破ったことにはなりません・・・。

セールスマン 君が切符の係に・・・、そんなことができるのか？

男 はい、でもそれには手続きが必要です・・・。

セールスマン その手続きには時間がかかるのか？

男 今ならそれほどかからないと思います。

セールスマン だったらすぐにでも手続きしてくれないか・・・。

男 分かりました。まず、切符の係になるためには、切符の係に任命されなければなりません。なので、あなたが任命してください。

セールスマン 私が・・・？！

男 はい、僕が自分で自分を任命する訳にはいきませんから・・・。

セールスマン でも、そういうことは普通、君の上司とかがするものなんじゃないのか？

男 普通はそういうものなのかもしれませんが、この駅には今、あなたと僕しかいません、

あなたが僕を切符の係に任命しなければ、僕は切符の係になれません。僕が切符の係になれば、あなたは切符を買うことができないうことになります・・・。

セールスマン そう言うことだな・・・。それで、どうやればいいんだ？わたしは任命なんてやったことがないんだ。

男 それなら、僕もやったことはありません・・・。でも、普通でいいと思いますよ。

セールスマン 普通の任命って、どういう・・・？

男 僕はやったことがないので分かりませんが、あなたの思っていることが普通だと思いませんよ。

セールスマン だから私もやったことがないんだから、何も思っていることなんてないよ・・・。

男 困りましたね・・・。

セールスマン 普通かどうかわからないけど、一度やってみようと思うんだが、いいかな？

男 普通かどうか分からないんですね？

セールスマン 普通がどんなものか分からないんだから、普通かどうかなんて分からないよ……。どうしても普通じゃないとダメなのか？

男 そういう訳ではないですが、普通が一番無難かなと……。

セールスマン それだけの理由なら私が一度やってみてもいいだろう？

男 構いませんが、できるだけ普通にお願いします……。

セールスマン まあ、できるだけやってみるよ……。初めてのことはやっぱり緊張するもんだな……。それじゃ、始めるよ。

男 はい、お願いします……。

セールスマン 駅員さん、君を切符の係に任命します……。どうだろう？今の。

男 とつても普通ほくて良かったと思います。

セールスマン そうか、じゃ……。

男 でも、それだけじゃ僕を切符の係に任命したことにはなりません……。

セールスマン えっ？良かったんじゃないのか？何か、いけないところがあつたかな……？

男 いけなくはありませんが、ただ僕は本当の切符の係になる訳ではないので、臨時の切符の係、ということにしてみませんか？

セールスマン ああ、そういうことなら……。臨時の切符の係だね……。では、駅員さん、君を臨時の切符の係に任命します……。これでいいだろう？

男 それが……。

セールスマン どうした？臨時の切符の係にしたじゃないか、何がいけないんだ？

男 臨時の切符の係はいいんです、でもそれだけだと、僕はずっと臨時の切符の係でいなければなりません。本当の切符の係が戻ってきたら困るんですよ。臨時の切符の係のわたしが、本当の切符の係の仕事を取ったみたいで、気まずいじゃないですか……。

セールスマン まあ、それはそうだと思うけど……。だったら、本当の切符の係が戻つて来るまでの間、とやうことでもいいんじゃないか？

男 戻つて来るまでの間……？

セールスマン そうだよ、本当の切符の係が戻つて来るまでの間、臨時の切符の係とやうことでもいいじゃないか。

男 そうですね、じゃ、それをお願いします。

セールスマン ああ、分かった。駅員さん、君を本当の切符の係が戻つて来るまでの間、臨時の切符の係に任命します。これで文句なしだろ……。

男 それが、ちよつと……。

セールスマン おい、まだ何かあるのかよ？！何でもっと初めに言わないんだ？！

男 すみません、今、気が付いたので……。

セールスマン 分かったよ、もう……。それで、どうすればいいんだ？

男 問題はですね、僕が臨時の切符の係をしている間、誰がホームの係をするのか？とやう

ことなんです。

セールスマン あっ、そうか……。君が切符の係をしている間は、誰もホームを見る者がいないのか……。

男 試しに、あなたがやってみると言うのはどうでしょう？

セールスマン やらないよ！ 駅員でもないのに……。君がやればいいじゃないか。

男 僕が……。?!でも僕は臨時の切符の係をしてるんですよ。

セールスマン 切符の係と言うのは、切符を買う人がいない間は手が空いてるんだろ？

男 ええ、まあ……。

セールスマン だったら、ホームの係も一緒にできるんじゃないのか？

男 ホームの係も一緒に？

セールスマン ああ、だから君がホームの係と臨時の切符の係を一緒にやればいいんだよ、兼任すればいいんだ。

男 それは名案です。じゃ、それでお願いします。

セールスマン 分かった、これが最後だ……。駅員さん、君を本当の切符の係に戻って来るまでの間、ホームの係兼任の臨時の切符の係に任命します……。これで君は……。

男 (不満げに首をかしげる)……。)

セールスマン まだ何か不満があるのか？

男 僕は不満を言ってる訳じゃありません！

セールスマン でも、まだいけないところがあるんだろ……？

男 いけないところと言うか……。全体的には今のでいいと思うんです。ただ、少し引つかかる場所があつて……。

セールスマン 引つかかる場所……？

男 僕はもともとホームの係の駅員です。それなのに、ホームの係兼任の臨時の切符の係と言うのはおかしくありませんか……？

セールスマン どこが?!

男 そのままで、僕はホームの係が兼任で、もともと臨時の切符の係だったように聞こえます……。

セールスマン じゃ、逆にすればいいんだな?!

男 どうしてそんなに投げ槍なんです？

セールスマン 君が後からごちゃごちゃ言うからじゃないか……。

男 あなたがちゃんと任命しないからいけないんです。

セールスマン ちゃんとしてるじゃないか……。だいたいどっちの係が兼任でも、そうたいた違いはないだろ。どうせ本当の切符の係が戻って来るまでの間だけなんだから……。

男 分かりました。僕はそもそも臨時の切符の係になりたい訳ではありませんから……。

この話はなかったということ……。

男、ホームへ戻ろうとする。

セールスマン おい！どこに行くんだ？

男 僕はホームの係ですから。(行こうとする。)

セールスマン ちょっと待って！分かった、私が悪かった……。ちゃんとやるから……。
エーっと……。何だったかな？

男 ですから、ホームの係が兼任だと、もともと私が臨時の切符の係みたいでおかしいと言ったんです。

セールスマン ああ、そうだったな……。臨時の切符の係兼任のホームの係が正しい。
男 じゃ、それをお願いします。

セールスマン 分かった。じゃ、駅員さん、君を本当の切符の係が戻って来るまでの間、臨時の切符の係兼任のホームの係に任命します……。良かったんじゃないか？

男 いいと思います。これで僕は臨時の切符の係兼任のホームの係になりました。それで、ご利用は……？

セールスマン えっ？ああ、切符を……。

男 そうでしたね。それで、どちらまで？

セールスマン 東京まで……。

男 どうしてです？

セールスマン えっ……？

男 ですから、どうして東京までの切符が必要なんです……？

セールスマン 東京に帰りたいからじゃないか。

男 どうして東京に帰りたいんです……？

セールスマン それは、私が切符を買うことと何か関係があるのか？

男 もちろん、関係があるから聞いてるんです……。言いたくありませんか？

セールスマン 言いたくない訳じゃないけど、でも……。

男 無理には言いませんが、ただ……。

セールスマン いや！言いたくないとは言っていない……。東京に帰りたい理由を言えばいいんだな……。

男 あっ、ちょっと待ってください……。

男、胸のポケットから手帳とペンを取り出し、ベンチに座る。

セールスマン 何をするつもりだ？

男 今から聞くことを書き留めるんですよ、忘れては困りますから……。じゃ、どうぞ……。

セールスマン 東京には妻と子供がいるんだ。

男 (書き留めながら。) 東京には、妻と子供がいる……。男の子ですか？女の子ですか？
セールスマン ……。

男 お子さんです……。どちらです？

セールスマン あっ、ああ……。娘、娘だ……。

男 子供は娘。いくつです？

セールスマン 確か……。今年で15になったと思うんだが……。

男 15になったと思う……。それで？

セールスマン ああ、私はセールスの仕事をしているんだが……。でも……。

男 どうしたんです……？

セールスマン 本当にこんなことが必要なのか？今まで切符を買うだけであれこれ聞かれましたが……。

男 あなたは今までに、臨時の切符の係から切符を買ったことがありますか……？

セールスマン さあ、どうだろ……。？私には切符の係の人が臨時かどうかは分からないから……。

男 でしたら、臨時の切符の係から切符を買ったことがないと思います。臨時の切符の係なら、僕のようにあれこれ聞くはずですから……。臨時の切符の係と言うのは心配性なんですよ、どうしてだかわかりますか？

セールスマン いいや。

男 臨時の切符の係が切符を売ると、後で本当の切符の係が打った相手のことをあれこれ聞いて来ますよ。「どんな奴に売ったんだ？」とか、「おとこか？おんなか？」、「仕事は何だ？」、「どうしてそんなところに行くんだ？」とか、しつこく聞いて来ます。臨時の切符の係は本当の切符の係より立場が弱いので、答えない訳にはいきません……。臨時の切符の係の立場が弱いことをいいことに、本当の切符の係は臨時の切符の係にあれこれ聞いてちゃんと仕事をしたか試すんです。でもいつも聞いてくる訳じゃありません、時々抜き打ちのように聞いて来ます、本当に陰険なんです。だから、臨時の切符の係はみんな心配性になるんです。

セールスマン 臨時の切符の係と言うのは、結構大変なんだ……。

男 はい、結構大変なんです……。それで……？

セールスマン えっ？

男 続きですよ。

セールスマン ああ……。どこまで話したかな？

男 (手帳を見て。) セールスの仕事をしている、までです。

セールスマン うん、そうだった……。セールスの仕事をしているんだが、仕事の都合でなかなか家に帰ることができないんだ。

男 (書きながら。) あまり家に帰れない……。どうしてそんなに帰れないんです？

セールスマン あちこち旅をしながらセールスしてるからね。

男 なるほど……それで？

セールスマン 家に帰るのはたいてい妻に暮らして行く為のお金を渡すときなんだけど、妻と娘はそのお金で、次にわたしが帰るまでの間生活してるんだ。だから……。

男 ちよつと待ってもらえますか?! (急いで書く。)それで、いくら渡すんです？

セールスマン えっ?いくら……?

男 はい、その暮らして行く為のお金というのは、いくら渡すんです？

セールスマン それはまあ、それなりに。

男 それなりと言うと……?

セールスマン それなりは、それなりに決まってるじゃないか……。

男 まあ、いいでしょ。それで？

セールスマン だから、私が早く家に帰らないと、妻と娘が困るんだよ。

男 それは、あなたが早くお金を持って帰らないと、奥さんと娘さんが困るということですね……。

セールスマン 今私が言ったじゃないか。

男 確認しただけですよ、いけませんか……?

セールスマン いや……。

男 それで、どのくらい困ります？

セールスマン はあ……?

男 ですから、奥さんと娘さんがどのくらい困るのか聞いてるんです。

セールスマン それは、私がお金を持って帰らないと、ってことなのか？

男 そうですよ。

セールスマン だったら、かなり困るんじゃないかな

男 (書きながら。)かなり困ると思う……。どうしてそう思うんです？

セールスマン どうしてって、お金がないと暮らしていけないじゃないか。

男 貯えはないんですか？

セールスマン 少しはあると思うけど……。

男 (書いて。)少しは貯えがあるので、あまり困らない。

セールスマン ちよつと、そんなこといってないじゃ……。

男 以上です……。

男、ポケットに手帳とペンを戻す。

セールスマン ……?

男 以上で質問は終わりです。

セールスマン ああ、そうなのか。

男 これより切符を発行します。行先は東京でいいですね？

セールスマン ああ、いいとも。

男、再び手帳とペンを取り出し、何か書いて破り取りセールスマンに差し出す。

セールスマン (受け取って。) 何だい？これは……。

男 切符です。

セールスマン 切符……？これはただの紙切れじゃないか。

男 ただの紙切れじゃありません、よく見てください。

セールスマン (紙切れをよく見て。) 東京行き切符。臨時の切符の係兼任のホームの係発行……。何のつもりだ？

男 ですから、切符です。

セールスマン こんな切符じゃないだろ！君は本当に駅員なのか？

男 今さら何を言ってるんです？僕はあなたが決めた駅員です……。

セールスマン それは、そうだが……、もつとちゃんとしたものがあるだろ？

男 ちゃんとしたもの……？もしかして、本当の切符のことですか？

セールスマン 本当の切符に決まってるじゃないか……。

男 僕は臨時の切符の係兼任のホームの係ですから、本当の切符は出せません。ですから、あなたに渡したのは臨時の切符です。

セールスマン 臨時の切符……？

男 はい、臨時の切符の係が出せるのは、臨時の切符だけなんです……。

セールスマン これで、汽車に乗れるんだらうな？

男 もちろんですよ、それはちゃんとした臨時の切符ですから……。

セールスマン いいだろ。それで、料金は？

男 一万円です。

セールスマン 一万円！

男 そうです……。

セールスマン 高すぎるだろ！

男 でも、あなたはお金持ちですから。

セールスマン 金持ちなんかじゃないよ！

男 それなりのお金を持つてるんでしょ？

セールスマン それは、家族が暮らして行く為のお金じゃないか……。

男 仕方ありませんね、五千円でいいです。

セールスマン どうして急に五千円になるんだよ?! 料金は始めから決まってるものですよ！

男 ですから、私は始めに決められた料金を言ったのに、あなたが高いと文句を言うからですよ。

セールスマン 客が文句を言えば料金は安くなるのか?!

男 僕は臨時の切符の係ですよ、立場が弱いんです。お客さんから文句を言われたら、それに従うしかないじゃないですか。

セールスマン 別に文句を言ったわけじゃないんだ、ただ、料金が高すぎると思ったから抗議しただけじゃないか。

男 それを文句というのでは・・・?

セールスマン 分かった。一万円だね。

セールスマン、上着の内ポケットから財布を取り出し、一万円を男に差し出す。

男 ですから、五千円です。

セールスマン 決められた料金が一万円なら、ちゃんと払うよ。

男 あなたは文句を言ったので五千円です。

セールスマン あれは抗議だって言ってるじゃないか!だから一万円払うよ。

男 いいえ、あれはれっきとした文句でした、ですから五千円です。

セールスマン 文句じゃない!だから一万円だ・・・。

男 料金が安く済むんですから、文句を言った方にしてあげばいいじゃないですか。

セールスマン 料金の問題じゃないんだ、私の名誉の問題だよ。

男 名誉・・・?

セールスマン だって、本当の切符の係の人が戻ってきたら言うつもりなんだろう?

男 何をです?

セールスマン 私が文句を言ったから、料金は五千円にしたって言うつもりなんだろう?

男 もちろん言いますよ、事実ですから。

セールスマン だろう、だから困るんだ。

男 何が困るんです?

セールスマン 私が文句を言ったから料金が安くなったんだよ・・・。

男 やっぱり文句を言ったんですね?

セールスマン 違うよ、これは例えばの話だ。だから、例えば私が文句を言って切符が安くなったとするだろ、それを君は本当の切符の係の人に言うんだよね?

男 言います。

セールスマン それを聞いた本当の切符の係の人は、私のことを嫌な客だなんて思うですよ。本当の切符の係の人はそれをまた別の人に言いふらすんだ、「文句を言って切符の料金を安くさせるなんて、最悪の客だぜ。」って・・・。

男 本当の切符の係ならそうするに違いありません。

セールスマン そんなことをされたら、この街は私の悪口で持ち切りだ。もうここにいることはできないだろう。

男 でも、あなたは東京に帰るでしょ。

セールスマン 東京に帰っても、私の悪口は残るじゃないか……。

男 嫌な人間だと思われたくないんですね。

セールスマン その通りだ……。

男 でしたら、料金は一万円で結構です。

セールスマン 本当に?! ありがとう……。

セールスマン、急いで財布から一万円を取り出し男に渡す。

男は受け取った札を無造作にポケットにねじ込む。

男 確かに料金は頂きました、ありがとうございます。

セールスマン これで私は文句を言わずに決められた料金で切符を買ったということだね?

男 そうです。あなたは決められた料金で切符を買いました。

セールスマン ああ、安心したよ、ありがとう……。

男 では、僕はこれで、ホームの仕事がありますから。

セールスマン ああ、そうだったね……。

男、足早に改札からホームへ出て行く。セールスマンは少しして何かを思い出したように改札に駆け寄り、身を乗り出す。

セールスマン 君……! 駅員さん……! 駅員さん!

駅員にセールスマンの声は届かなかったようだ。

セールスマン、仕方なくベンチに戻る。その直後、切符売場場のガラス窓が開いて駅長が顔を出す。

駅長 (眠そうに。) どうかしましたか?

セールスマン えっ……?! あなたは?

駅長 私?

セールスマン ええ、あつ、本当の切符の係の人?

駅長 本当の切符の係? 何です? それは……。ちょっと待ってください……。 (暫くして改札の方から出てくる。) ああ、すみません、少し眠ってしまったようです。それで、その本当の切符の係って何のことです……?

セールスマン 本当の切符の係の人じゃないんですか?

駅長 私はこの駅の駅長をやっておりますが……。

セールスマン 駅長ですか……。ずっとここに？

駅長 ええ、ずっとここで駅長をやっております。

セールスマン いや、そうじゃなくて、ずっとここにいたんですか？

駅長 もちろんいましたよ、私は駅長ですから。

セールスマン でも、駅員さんは誰もいないって……。

駅長 駅員？と言うと？

セールスマン ホームの係の人ですよ。

駅長 ホームの係？そんな者はここにはいません。

セールスマン えっ……。？じゃ、切符の係の人は？

駅長 いや、そんな者もここにはいませんな。ここは小さな駅です、私以外に駅員はいません。

セールスマン そんなはずはありませんよ！だってさっきまで駅員さんが……。じゃ、

あの駅員は……？

駅長 どうやら偽物のようですな……。

セールスマン、改札の方へ駆け出す。

駅長 偽物ならもういませんよ！

セールスマン えっ?!でも……。

駅長 もう、とっくに逃げてますよ……。

セールスマン、ベンチに戻り力なく座る。

駅長 よくあることです、諦めなさい。

セールスマン よくあるんですか?!

駅長 はい、よくあるんです。

セールスマン そうなんですか……。

駅長 お客さん、あなたその偽駅員に騙されたんですよね？

セールスマン ええ……。

セールスマン、紙切れを駅長に渡す。

駅長 何です？これは。

セールスマン 臨時の切符だと言って買われました。

駅長 えっ?!こんなものを買ったんですか。見ればすぐ偽物だとわかるでしょ……。

セールスマン 私もそうじゃないかと思ったんですけど……、臨時の切符の係が出すから、

切符も臨時だとか言われて。

駅長 臨時の切符の係とは・・・？

セールスマン 私が任命したんです。

駅長 あなたが任命を・・・？！いったいどう言うことなんです？

セールスマン とにかく私は切符が欲しかったので、偽駅員に切符を買いたいと言ったんです。でも、偽駅員はホームの係で切符の係じゃないから、切符は売れないって言うんですよ。どうしたら切符を買えるのかって聞くと、臨時の切符の係に任命してくれたら切符を売ると言うので、仕方なく偽駅員を臨時の切符の係に任命したんです。でも正確には、本当の切符の係が戻って来るまでの間、臨時の切符の係兼任のホームの係なんですけどね。

駅長 何を言ってるんです・・・？！

セールスマン 分かりません・・・。

駅長 とにかく、うまく言いくるめられて、この紙切れを買わされたんですね・・・？

セールスマン はい、そのようです・・・。

駅長 それで、いくら払ったんです・・・？

セールスマン 一万円・・・。

駅長 そんなに！

セールスマン 私も高過ぎると思ったんですよ、だから文句を言ってやりました。そしたら、すぐ五千円にするって言って来ました。

駅長 それがどうして一万円になったんです？

セールスマン 私が文句を言って一万円を五千円にさせたと、本当の切符の係に告げ口するというのが・・・。嫌な客だと思われたくなかったんです・・・。

駅長 あっ、はっはっはっはっはっ・・・、これは失礼・・・。あなた、そんなことで一万円も払ったんですか。それで、どうされます？

セールスマン どうすると言うと？

駅長 あなたは被害に遭ったんだから、交番に届けないと・・・。

セールスマン 交番に？

駅長 はい、近くにありませんよ。

セールスマン ……。

駅長 どうしたんです・・・？

セールスマン ええ、実は・・・、偽駅員を駅員と決めたのは私なんです。もしかしたら騙されるかもしれないと分かっているながら、偽駅員を駅員と決めてしまいました。それなのに交番に届けるのは、ちょっと気が引けると言うか・・・。

駅長 あなたの訳の分からない事情はともかく、実際に被害に遭ってるんですから交番に届けばいいんですよ。

セールスマン でも・・・、まあ、どうせ届けたところでお金は戻ってこないでしょうし、

それに、ここに長居するつもりはありませんから。

駅長 そうですか。まあ、どうするかはあなたの自由ですから……。でも、これからは気を付けてくださいね、くれぐれも油断なさらないように。

セールスマン はい、ありがとうございます……。(駅長、立ち去ろうとして) あっ、駅長さん！

駅長 どうしました？

セールスマン 切符を、本物の切符をお願いできますか？

駅長 もちろん、構いませんよ。構いませんが……。汽車は来ませんよ。

セールスマン えっ……?!

駅長 申し訳ありませんが、汽車は来ないんですよ。

セールスマン 来ないって、どういうことなんです……？

駅長 何せこの長雨です、あちこちで土砂が崩れて線路を塞いでしまったらしくて……。もちろん復旧には全力で取り組んではいるんですよ。

セールスマン それで、いつ復旧するんです？

駅長 うううん……。二時間後になるか、三時間後か、明日までかかるのか、正直なところ分からないんです……。

セールスマン それは困ったな……。どうしよう。

駅長 今日のところは近くに宿を取られてはどうです……？

セールスマン 今日中に何とかならないんでしょうか？

駅長 えっ?!

セールスマン 今日中に、何とかありませんよね……。

駅長 はい、こればかりはどうにも……。

セールスマン すみません、変なこと言っ……。

セールスマン、ベンチに座る。

駅長、立ち去ろうとするが、すぐさま足を止める。

駅長 お急ぎですか……？

セールスマン ええ。

駅長 どうしてそんなに急いでるんです……。？もし、よろしければ……。

セールスマン 妻と子供が待ってるんです……。私の帰りを。

駅長 あなたの帰りを……。あなた、お仕事は……？

セールスマン セールスをやっています。

駅長 セールス？

セールスマン ええ、セールスマンなんです。

駅長 セールスマン……。？その、セールスマンと言うのはどういったお仕事で？

セールスマン 物を売るのがセールスマンの仕事なんですが、私の場合はいろんなところを巡って物売ってます。

駅長 行商ですか？

セールスマン 似たようなものです。ただ、セールスマンはもう少し高価なものを買ります。私の場合はこれです。

セールスマン、ベンチの上に置いたタイプライターを取り、膝の上に乗せる。

駅長 それはいったい何をするのです？

駅長は興味津々でセールスマンの隣に座る。

セールスマン これはタイプライターと言って英語の文章を活字で作れる機会です。外国では知こと上の文書、契約書や手紙だって何でもタイプライターを使うそうです。

駅長 私にはよくわかりませんが、そんな者が売れるんですか？

セールスマン 駅長さん、これからは英語の時代ですよ、英語は世界の共通語なんです。日本もこれからますます外国との貿易が活発になりますよ。そんな時だからこそ、このタイプライターが必要とされるんです。でも、だからと言って私は、外国を相手に取引しているような大会社に売り込むようなことはしません……。どうしてもだか分りますか……？

駅長 いいえ、全く……。

セールスマン そんな大会社にはもうすでにタイプライターなんて置いてありますよ。

駅長 だったら、どこに売るつもりなんです？

セールスマン それは、秘密です。

駅長 秘密？！

セールスマン はい、話せません。

駅長 どうしてですか?!ここまで話しておいて殺生な……。

セールスマン すみません、同業者に知れると困りますから。

駅長 私は駅長で、同業者ではありませんよ。

セールスマン あなたがよそで話さないとも限りませんから……。

駅長 私が信用できませんか……？

セールスマン そういう訳ではありませんけど……、すみません。

駅長 あっ、はっはっはっはっはっはっ……。いやいや、いいんですよ。そういうことは軽々しく話しちゃいけない、大切な商売のことですから……。でも、あなたの話からすると、たくさん売れたんでしょうね?その、タイ……。?タイ……。?

セールスマン タイプライター。

駅長 そうそう、そのタイプライター。どうも横文字はいけません。

セールスマン ええ、おかげさまで……。まとまったお金も手に入りました、だから一日でも早く妻と子供に届けたくて……。ずいぶん長く帰ってないものですから。

駅長 どのくらい帰ってないんですか……？

セールスマン かれこれ、三年に。

駅長 そんなに……！

セールスマン もう、私のことなど当てにしないかもしれない。

駅長 そうかもしれませんね……。どうしてそんなに帰らなかったんです？

セールスマン 帰らなかった訳じゃありません！帰れなかったんです……。なかなか稼げなくて、手ぶらじゃ帰れませんから。でも、やっとまとまったお金が手に入ったんです……。！何とかありませんか？あなたの力で……。

セーラー服の少女、登場、遠目に二人の様子を窺う。

駅長 あなたの勝手な思いで、三年もの間奥さんとお子さんに寂しい思いをさせるなんて……。。

セールスマン 無理、ですよね……。

駅長 三年も帰ってないのに、帰りたいですか？

セールスマン 私は受け入れてもらえなくても仕方ありません、でもお金だけは渡してやりたくて……。

駅長 分かりました。私には何の力もありませんが……。、何とかなるかもしれません。

セールスマン 本当ですか？！

駅長 でも、それにはあなたの協力が必要なんですが……。

セールスマン もちろん協力します。それでなにをすれば……？

駅長 少し、出していただけませんか？

セールスマン 何を出せばいいんです？

駅長 それを、私の口から言うのは……。、ちょっと……。

セールスマン お金ですか？

駅長 まあ、そんなところです。でも、私が要求したなんて思わないでくださいね。それは線路を早く復旧させるために使うんですから。

セールスマン それで何に使うつもりなんです？

駅長 復旧の作業に当たっている連中に、酒を奢ってやろうと思ひましてね。

セールスマン そんなことで汽車が通るんですか？

駅長 連中は皆大酒のみばかりです。酒さえ飲めれば幾らでも仕事をしますよ。今日中に作業を終えることができたなら、たらふく酒を飲ましてやるって言えば、連中は酒を飲みたいがために死に物狂いで働きます。そうすればあなたが望むように、今日中に汽車を通すことができるかもしれません。どうです？それほど多くは必要ありません、酒代程度でい

いんです・・・。

セールスマン 分かりました・・・。

セールスマン、上着の内ポケットから財布を取り出し、数枚の札を駅長に渡す。

駅長 こんなに！いいんですか？

セールスマン その代わり、なんとか今日中をお願いします。

駅長 任せてください。それじゃ早速、連中に発破をかけて来ますか。（ベンチから立ち上がる）と、少女の存在に気付く。）またお前か！そんなところで何をしている？

少女 ……。

駅長 ここはお前のような者が来るところじゃない。それとも、汽車に乗るつもりなのか？

少女 （首を横に振る。）……。

駅長 それなら早く家に帰りなさい！

少女 ……。

駅長 しっ！

少女 （少し後ずさりする。）……。

駅長 しっ！しっ！

駅長、野良猫のように少女を追い払う。少女は後ずさりしながら走り去る。

駅長 困ったもんです。

セールスマン 知ってる子ですか？

駅長 まあ、少しは……。何を企んでいるのか、しょっちゅう駅の辺りをウロウロしてるんです……。

セールスマン 悪さをするようには見えませんでしたけど……。

駅長 無暗に人を信用してはいけません。

セールスマン えっ？！

駅長 これは忠告だと思って聞いてください。この街は田舎ですが、悪い奴らも結構います。それに、最近この街の近隣で強盗事件が多発しているそうですよ。ついに三日前もあなたのような……、セー、セー……。

セールスマン セールスマン。

駅長 そうそう、そのセールスマンが襲われたそうです。あなたは大金をお持ちだそうだから特にお気お付けなさい……。

セールスマン その襲われたセールスマンはどうなったんです？

駅長 亡くなられたそうです。

セールスマン 殺されたんですか？！

駅長 はい、刃物で刺されたそうです。

セールスマン そうですか、お気の毒に……。

駅長 あなたもそうならないとは限りませんよ……。

セールスマン ええ、気を付けます。

駅長 では、復旧の状況が分かり次第知らせに来ますので。

セールスマン ありがとうございます、お願いします……。

駅長 (外の様子を見て。) 小降りになったようですね……。

駅長、雨の中をそのまま駅の外へ走り去る。

再び少女登場、遠くからセールスマンの様子を窺う。

セールスマン、外の雨の様子を見ると同時に少女の存在に気付く。

セールスマン そんなところに立っていたら風邪を引くよ……、さあ。(少女に手招き。)

少女 ……。

セールスマン どうしたんだ……？さあ……。

少女 知らない男の人に声をかけられても、無暗について行ってはいけないって、お母さんがそう言ってたわ。

セールスマン 君はいい子だね、お母さんの言いつけをちゃんと守って……。でも、私は

そんな悪い人間じゃないと思うよ。

少女 おじさんは悪い人よ！

セールスマン 私が？どうして？

少女 だって、あの人にお金あげたじゃない、仲間なんですよ……？

セールスマン 君の言っていることがよくわからないんだけど……。駅長さんとは今日あったばかりだし、仲間という訳じゃないだろ？確かにお金は渡したけど、あげた訳じゃないんだ。

少女 本当？

セールスマン 本当？

少女、恐る恐る待合室に入る。
本当さ……。だから、早くこっちにおいで、風邪ひくから……。

少女、恐る恐る待合室に入る。

セールスマン (カバンから手拭いを取り出して。) さあ、これで拭きなさい。

少女 ありがとう……。ここに入るのは久しぶり。いつもここに入ろうとすると、あの人がやって来てすごい剣幕で怒るの、何もしてないのに……。

セールスマン そうなんだ、それはひどいね。

少女 そうでしょ、ひどいのよ……。

セールスマン 家に帰らなかったんだね。

少女 あの人には悪い人よ。

セールスマン えっ……?!

少女 あの人には悪い人なの。

セールスマン 駅長さんのことかな……？だったらそうじゃない、いい人だよ。

少女 ……。

セールスマン もう、帰った方がいいよ。

少女 あの人に騙されてるのよ……！おじさんが渡したお金だって、あの人には全部自分で使うつもりなの。

セールスマン 人を悪く言うのは、あまり感心しないな。

少女 違うの、悪口なんて言っていない！本当のことなの、だからもう誰にもお金を渡しちゃダメ……。この人は悪い人ばかり、本当よ、本当なの！

セールスマン 分かった、君の言う通りにするから……。もう帰りなさい、家の人心配するよ。

少女 ……。

間。

少女 あの。

セールスマン 何……？

少女 お父さん？

セールスマン えっ……?!

少女 お父さん、なんでしょ？

セールスマン 私が?!

少女 お父さんなんでしょ？

セールスマン どうして私がお父さんなんだい？

少女 だって、この手ぬぐいお父さんの匂いをするもの……。

少女、手ぬぐいを鼻にあて、深呼吸をするように匂いを嗅ぐ。

セールスマン 匂い……？もしかして、君はお父さんの顔を知らないのか？

少女 憶えてないわよ。だってお父さん、わたしがこおんなちっちゃん頃に出て行ったんだよ……。

セールスマン そうなのか……。でも、私は君のお父さんじゃないんだ。この街は初めてだし、だぶん、君のお母さんのことも知らないと思うよ。

少女 お父さんはわたしのことが分からないだけよ！お父さんが出て行ったのは、まだ私が小さかった時だし……。ほら、わたしをよく見て。ずいぶん大きくなったでしょ。ほ

ら、オッパイだって……。

少女、胸を張ってオッパイを強調する。

セールスマン そ、そうみたいだね。

少女 やだぁ、お父さんエッチね。

セールスマン いや、そういうことじゃなくて……。

少女 よく見て。まだ、わたしが分からない？

セールスマン だから私は……。

少女 わたしの匂い、憶えてる……？わたしはお父さんの匂い憶えてるのに……。お父さん……。

少女、セールスマンの腕を掴んで体を寄せる。そのはずみでセールスマンと少女はベンチに座る。

セールスマン や、やめなさい！

少女 わたしのこと嫌い？

セールスマン 嫌いじゃ、ないけど……。

少女 だったら、いいじゃない……。

少女 セールスマンの胸に体を寄せる。

酒場の女将登場。

セールスマンと少女は女将に気付かない。

セールスマン だ、だから私は……。

女将 いけないねえ、そんな子供に手を出しちゃ……。

セールスマン、少女を突き放す。少女は地べたに転がる。

セールスマン わ、私はないも……。

女将 (少女に。) 仕事の邪魔して悪かったねえ。

少女 何のことかしら？変なこと言わないで、おばさん。

女将 とぼけなさんな。どうせその旦那に色仕掛けて抱き着いて、懐の中のものを頂戴しようとしてたんだろ？！

セールスマン、慌てて上着の内ポケット辺りに手を当てて、財布の無事を確認

する。

少女 そんなことしてないわよ！

女将 旦那、気を付けてくださいよ。あたしが声をかけなかったら、今頃この子に抜かれてましたよ。

セールスマン この子が・・・?!

少女 嘘よ！わたしはそんなことしないよ。お父さん、信じて……。わたしは、そんな悪い子じゃないの。

セールスマン ……。

女将 おとうさんだって?! いったい誰のことをお父さんなんて言ってるんだい・・・?も しかして、旦那のことを言っているのかい?

少女 そうよ、だってお父さんなんだもん……。

女将 馬鹿言うんじゃないよ！この子は。あなたの父ちゃんはこんな立派な方じゃないだろ。あなたの父ちゃんは……。

少女 違うわ！この人がわたしのお父さんだもん……。

女将 旦那、黙ってないではつきり言っちゃってくださいな。あたしは旦那がこの子の父親じゃないってことは分かっていますから……。

セールスマン だから私は……。

少女 (セールスマンの腕にすがり。) おとうさんだよね！わたしのお父さんだよね！

女将 おや、また色仕掛けかい。旦那はお前の父ちゃんじゃないんだ、そこをおどぎ！

少女 嫌だ！

女将 おどぎったら、おどぎ！

女将、セールスマンから少女を力づくで引き離す。

少女、地べたに転がる。

女将 (少女の腕を掴んで。) さあ、一緒に来るんだよ！

少女 嫌！お父さん助けて！

セールスマン どこへ連れて行く気だ？

女将 決まってるじゃないですか、交番ですよ。

セールスマン 何もそこまでしなくても……。

女将 おや、この子を庇おうって言うんですか?! 泥棒なんですよ、この子は。

セールスマン 泥棒って……、君の思い違いじゃないのか？

女将 思い違い？

セールスマン ああ。現に私は何も盗られてはいない。それにまだ子供じゃないか……。

女将 子供だって悪いことはしますよ。それに、旦那が思ってるほどこの子は子供じゃありません。

ませんよ。(少女に。) そうだろ？

少女

女将 まあ、いいか いいお父さんがいてよかったねえ。今回はこの旦那に免じて許してやるから、お前の母ちゃん呼んできな。

セールスマン 今度は何をする気なんだ？

女将 何もしやしませんよ。この子の母親にちよいと貸しがありましたね (少女に。) 早く家に帰って母ちゃん呼んできな！

少女

女将、ベンチに座り、セールスマに寄り添う。

セールスマ な、何を

女将 早くしないとあんたのお父さん、誘惑しちゃうよ。

少女 ダメ！そんなの、絶対ダメ！

少女、慌てて走り去る。

女将、少女が走り去るのを見届けて、セールスマから離れる。

セールスマン いったい何をする気なんだ ?

女将 心配ですか ? 旦那には関係ないことですから、もうあの子には関わらないでください。

セールスマン 関わるなって言ったって、ここに母親を呼んだのは君じゃないか。

女将 だから旦那は知らない振りをしてればいいんです。

セールスマン そんなこと言ったって あの子はわたしのことを父親だと思ひ込んでるんだぞ。

女将 くれぐれも、父親だなんて思っちゃいけませんよ！それがあの子の手口ですから。

セールスマン またそんなことを

女将 まあ、あの子のことをどう思おうと旦那の勝手ですがね でも、あの子は旦那が思っている様な子じゃありませんよ どうしてそんなにあの子を庇うんです？

セールスマン 庇ってる訳じゃ

女将 あの子が好きなんですか？

セールスマン 何言ってるんだ、まだ子供じゃないか

女将 いいじゃないですか、男と女なんですから

セールスマン 娘に、少し似てるかなって。

女将 娘さんがいらっしやるんですか？

セールスマン ああ、ちょうどあの子と同じ年頃かな あの子を見ると、どうして

も娘を重ねてしまうんだ。だから、悪いことをするようには思えないんだよ。

女将 あの子は旦那の娘さんのようないい子じゃありません。父親と母親を見ればよく分かりますよ……。

セールスマン あの子の父親を知っているのか？小さい頃に出て行ったって言ってたけど、女将 よく知ってますよ。なんせうちの常連でしたから。

セールスマン 常連？

女将 うちは飲み屋なんですけどね、よく来てましたよ。博打狂いで酒癖の悪いケチな男でねえ……。まあ、結局のところ借金こさえた挙句、女房子供置いてトズブラしたんですけどね……。

セールスマン それで、父親はどうしたんだ？帰って来ないのか？

女将 帰ってこないでしょうねえ……。たとえ帰ってきたとしても、ただじゃすみませんから、まだ借金も残ってるでしょうし……。

セールスマン それじゃずいぶん苦労してるんだろうね。

女将 誰がです……？

セールスマン あの子と母親に決まってるじゃないか！

女将 あはははははははははは……。苦労？あの親子が……？

セールスマン 違うのか……？

女将 旦那はお人がいいんですね。でも、くれぐれもあんな小娘に関わっちゃいけませんよ。じゃ、あたしはこれで……。

女将、立ち去ろうとする。

セールスマン 女将！

女将 どうしたんです？

セールスマン どこへ行くんだ？

女将 店に帰るんですよ……。これでも結構繁盛してるんですよ、うちの店。

セールスマン でも、あの子の母親が来るんじゃない……。

女将 来やしませんよ……。あっそうだ、旦那も家で一杯どうです？すぐそこなんですよ。

セールスマン いや、遠慮しとくよ……。

女将 お酒はお嫌いなんですか？

セールスマン 嫌いじゃないけど……、汽車を待ってるから。

女将 汽車なら明日まで来ないって話ですよ。それに、こんな所にいたら体が冷えちまいますよ。若い子もいるんですよ、楽しんで行ってくださいな。

セールスマン 本当はそうしたいところだが、もし汽車が来たら困るから……。

女将 そうですか……。まあ、無理にとは言いませんがね。明け方近くまでやってますから、もし気が変わったら寄ってくださいな、じゃ……。

女将、行こうとする。

セールスマン 本当に待たないのか……？

女将 ですから、来やしませんよ。

セールスマン でも、用があるって言ってたじゃないか。

女将 用ならありますよ……。今まであたしが呼びつけたって、来た試しがないんですから……。ですから来ませんよ。

セールスマン もし来たらどうするんだよ？私は何て言ったらいいんだ……？

女将 旦那は何も言わなくていいんです、無視してりゃいいんですよ……。

セールスマン でも、もう少し待った方が……。

女将 旦那もしつこいですね……！

セールスマン、少女が走り去った方を窺う。

セールスマン 女将！来たよ……。ほらあれ、そうじゃないか？

女将 本当だ。どういう風の吹き回しだろ……。旦那のおかげですかねえ。

セールスマン 私は何も……。

女将 でも旦那、あたしたちのことに口を出しちゃいけませんよ。あの親子に関わらないでくださいね。

セールスマン ああ、分かってる……。

母親、少女と共に登場する。

女将 よく来たじゃないか。用件は分かっているんだろうね？！

母親 女将さん、もう少し……。

女将 もう少し？もう少し何だって言うんだい……？まさか、待てって言うんじゃないだろうね！

母親 お願いします、女将さん、もう少し待ってもらえませんか？

女将 もう少しもう少しって、いったい何年待たせりや気が済むんだい？！いいかい、借金って言うのはね、利息が付きものなんだ。引き延ばせば引き延ばすほど、その分借金だつて大きくなるんだよ。それを知って言ってるのかい？

母親 もちろん知ってます。ですからお願いします、もう少しだけ……。

女将 ダメだね。今日はきっちりケリつけてもらおうよ……。まあいいや、今全部返せとは言わないから、今ある分だけ置いて行きな！全然ないわけじゃないんだろ？

母親 それだけは勘弁してください。そんなことをしたら、明日からどうやって生きて行けばいいんです……？

女将 あたしの知ったこっちゃないね。

セールスマン それはあまりに酷くないか?!

女将 旦那は口を挟まない約束ですよ。

セールスマン

女将 さあ、どうするんだい?! 出すのか出さないのかははっきりしてもらおうじゃないか!

母親

女将 そうかい、そっちがその気なら、あたしにだって考えがあるんだ

女将、少女の腕を掴み、無理に連れて行こうとする。

少女 嫌! お母さん!

母親 うちの子をどうするつもりなんです?!

女将 今日からうちの店で働いてもらうのさ

女将、少女を引っ張って行く。

少女 やだ! 放して . . . ! 助けて、お父さん! お父さん!

セールスマン ちょっと待つんだ . . . ! 女将、この子はまだ未成年だ、そんな子を店に出すつもりか?

女将 それがどうしたって言うんです。あたしがこの子の歳にはもう店に出てましたけど 心配なんかありませんよ、ちよいと色目使って、酔っ払いの相手してりゃいいんです。(少女に。) あんた、色目使うの得意だろ . . . ?

母親 それだけじゃないじゃありませんか?!

女将 何だって?

母親 わたし知ってるんですよ

女将 いったい何を知ってるて言うんだい?

母親 聞いたことがあるんです、女将さんの店は女の子たちに客を取らせてるそうじゃありませんか

セールスマン 客を取らせてるって 本当なのか?! 女将

女将 ええ、本当ですよ

セールスマン この子にも客を取らせるつもりか?

女将 もちろんそのつもりですよ。何年も待たされたんです。その方が手っ取り早いじゃありませんか。

セールスマン この子はまだ子供なんだ、そんなことが許されると思うのか!

女将 子供子供って、旦那は言いますけど、あたしから見ればこの子はもう立派な大人です

よ……。さあ、来るんだよ！

少女 そんなの嫌だ……。！

女将、少女を引っ張って行く。

母親 (女将にすがって。) 女将さん！女将さん！それだけは勘弁してください！

少女 助けて！お父さん！お父さん！

セールスマン いい加減にしないか！！

女将 旦那……。

セールスマン 借金はいくらなんだ？

女将 それを聞いてどうするつもりなんです……？まさか、旦那が借金の肩代わりを……？
やめてくださいいな、旦那は赤の他人じゃありませんか……。どうしてこの親子にそこま
でするんです？

セールスマン そんなことどうだっていいだろ。君はお金が返ってくればそれでいいはず
だ……。

女将 それもそうですね……。

セールスマン 借金はいくらなんだ……？

女将 そうね、利息も合わせて三万円ってどこかしら……。

セールスマン、上着のポケットから財布を取り出し、三万円を女将に突き出す。

セールスマン その子を放してあげるんだ……。

女将 いいんですかねえ、こんなことをして……。旦那は人助けのつもりなんでし
ょうけど、こんなことをしたってこいつらの為にはなりませんよ。かえって付け上
がらせるだけです。まあ、あたしはお金が返ってくればそれでいんですがね……。
(少女に。) いいお父さんがいて、良かったねえ……。

女将、立ち去る。

セールスマン 何て女だ……。

母親 何てお礼を言ったらいいのか……。

少女 当然だよ、お母さん。だってお父さんなんでもん。

母親 お前は黙ってなさい……。この人はお前のお父さんじゃないの。

少女 お父さんよ！お父さんじゃなきゃ誰がわたしたちを助けてくれるって言う
の……？！

母親 もういいから、お前は家に帰っていなさい。

少女 お母さんは？

母親 わたしは旦那さんにお話があるから……。

少女 じゃ、わたしも。

母親 お母さんの言うことが聞けないの……?!

少女 分かったわ。でも、お父さんと一緒に帰って来てね。

母親 早く帰りなさい。

少女 きつとよ……。

少女、未練を残しながら去って行く。

母親 すみません。あの子を許してやってもらえませんか？後でちゃんと言い聞かせますから。

セールスマン 私は何も……。

母親 父親が恋しかったんでしよう、あの子がまだ小さいときに家を出て行ったものですか……。

セールスマン 御主人はどうして家を……？

母親 あの人はどうしようもない人でしたから……。女がいたんです。たぶんその人と一緒に……。

セールスマン それで、今は何処に……？

母親 分かりません。

セールスマン それは困りましたね……。ご主人は借金をしていたんでしょ？それはどうしたんです？

母親 女将さんから聞いたんですね……。まだ残ってます。でも旦那さんに立て替えてもらったお金はちゃんとお返ししますから。

セールスマン 私が立て替えたお金はもういいんです。返してもらおうなんて思えませんから。

母親 いけません！そんなこと。

セールスマン いいんです、私が勝手にしたことですから。

母親 でも、それじゃ……。

セールスマン 私にも娘がいるんですけど、ちょうどあの子と同じ年頃です……。あの子を見てると何だか娘のようで、ほっとけなかつただけです。私が勝手にしたことですから、どうか気にしないでください。

母親 でも、それじゃわたしの気が済みませんから……。さっきはちゃんとお返しするって言いましたけど、本当はお返しするお金も当てもないんです。そのかわりといってはなんですが……。わたしを旦那さんの好きにしてください。

セールスマン 奥さんを好きに……。いやいや、それはダメです。そんなことはできま

せんよ……。

母親 ダメですよね……、こんな年増のオバサンじゃ。

セールスマン いや、違うんです！そんな意味じゃなくて……、何て言うか……、私には妻もいるし……、それにここで汽車を待たなくちゃいけません……。

母親 汽車は止まってるはずですよ。それに、奥様には黙っていれば分からないじゃないですか……。

セールスマン そんなことはありません……！奥さんは、その……、魅力的ですよ。母親 無理なさらないでください。

セールスマン 無理なんかじゃありません……！本当に、その……、魅力的ですよ。

母親 本当に？ウフフ……。わたしのどの辺が魅力的なんですよ……？

セールスマン それは、その……、どの辺がって言われても。

母親 やっぱり無理してるじゃありませんか！

セールスマン 違います……！違います。あの……、お、奥さんの顔は私の好みです。

母親 わたしの顔が……？ウフフフ……。旦那さんの好みは顔だけ……？

セールスマン 声も好みですよ。

母親 他には……？

セールスマン 手も好みですよ。

母親 それから？

セールスマン 足も好みですよ。

母親 わたしの体は？

セールスマン 好いで、いえ、違います！

母親 違うんですか？

セールスマン いえ、違います。

母親 どっちなんです？

セールスマン ……。

セールスマン、聞き耳を立てる。

母親 どうしたんです？

セールスマン 何か聞こえませんか……？

母親 何も……。話を逸らすつもりですか？

セールスマン 違いますよ……。ほら、聞こえます……。

遠くで、「お父さん！お母さん！」と叫ぶ少女の声。

母親 はい、聞こえます。あれは……。

セールスマン あの子です。娘さんですよ……。

少女の声 嫌だ、放して！もう、放してったら……！

社長、女衛、手下に無理やり引っ張られて、少女登場。

少女 お父さん！お母さん！

少女、じたばたする。

手下 こら、大人しくしろ……！

少女 キヤー！今この人わたしのお尻触った……！

手下 バ、バカヤロー！何もしてねえだろ。

少女 触ったじゃない……！いやらしいくわたしのお尻触ったわ。

母親 うちの子に何てことするの、このケダモノ！人でなし！

母親、わざとらしく泣き崩れる。

セールスマン 奥さん……？

社長 バカヤロー！（手下の頭をはたく。） 大事なお嬢さんに手を出すんじゃねえ！

手下 社長、俺は本当に何にもしてねえすよ。

少女、手下にアツカンペー。

手下 コノヤロー！（少女に手を拳げる。）

社長 てめえ、その手をどうするつもりだ……？

手下、ゆっくりと手を下げる。

母親 社長さん、これはどういうことなんです？今月分はもうお支払いしたじゃないですか、どうしてこんな所まで……？いったい何の用なんです？

社長 確かに今月分は頂きましたよ。でも、利息分だけじゃねえ……。まあ、そのことで奥さんに相談がありましたね、お宅までお伺いしたんですが……。娘さんがお母さんはここにいて言うんで……。聞くとところによると、ご主人帰って来たそうじゃありませんか……。

母親 うちの子がそんなことを……？（少女に。）あんだ！どうしてそんなことを……？！

少女 だって……。

社長 (セールスマンに。) その巨那……! あんたがそうなんだろう?

セールスマン どう言う意味です?

社長 あんたがこの子の父親かって聞いてるんだ。

セールスマン それなら違いますよ。

手下 しばらくくんじゃねえぞ……! (少女に。) あいつがおめえの父ちゃんなんだろう?

少女 ふん……。

社長 お嬢さん、この旦那がお父さんなんだろう?

少女 そうよ、お父さんよ。

手下 何だ?! てめえ!

少女 何よ……?!

社長 やっぱりそうじゃないですか。子供は正直なもんです……。嘘はいけません。

セールスマン 嘘なんかじゃ……。

社長 奥さんも、ご主人が帰ってるなら帰ってるって言ってもらわないと……。だってそ

うでしょ、もとはと言えばご主人のせいと奥さんが借金背負う羽目になったんですから。

母親 待ってください! この人はうちの子の父親でもわたしの主人でもないんですから

ら……。主人はまだ行き方知れずなんです。だいいち娘は父親のことなんて覚えちゃ

いませんよ……。

社長 (少女に。) お前、わたしに嘘を言ったのかい……? ?

少女 嘘なんかじゃない! あの人はわたしのお父さんなの。

社長 でもお前は父親のことを覚えてないんだろ……? ?

少女 覚えてなくてもお父さんのことは分かるの。お父さんはわたしのお父さんなの!

手下 訳の分からねえことを言ってるじゃねえ! この嘘つきが……。

社長 その子の言う通り、覚えてなくても父親のことは分かるんですよ。子供とはそういう

もんです。

手下 ええっ? !

社長 いい加減認めたらどうです? 娘が可哀想だと思わないんですか……? ?

セールスマン ですから本当に違うんです、私は父親ではありません……。その子はわた

しを父親だと思い込んでるだけなんですよ。

母親 この人の言う通りです。娘の父親は他にいます……。。

社長 奥さん、こんな亭主庇ったって仕方ないでしょ。あんたが苦勞するだけだ……。 (セ

ールスマンに。) あんた、女房子供に借金押し付けて逃げる気かい?

セールスマン ですから、私は……。

社長 酷い男だねえ……。 どうだい、お前の父親はお前たちに借金押し付けて逃げる気だ

よ。

少女 お父さん……。

社長 そうかい、あんたがその気なら仕方がない。(女衛に。) 旦那!

女衛 へい。

社長 奥さん、この旦那がね、あんたの娘に言い奉公先を紹介してくださいさるって言うんだよ。母親 奉公先ってどういうことですか?

社長 あんたの借金の話さ……。どうだい、娘を奉公に出してみないか……?

母親 お金なら今月分は……。

社長 あんた、毎月利息さえ払ってりゃそれで済むとも思ってたのかい……?

母親 でも、約束したじゃないですか!

社長 約束?

母親 初めにお借りしたときに、利息だけ払えばそれでいいって……。

社長 (手下に。) おめえ、そんな約束したのか?

手下 いいえ!とんでもない。

社長 してないそうだよ。

母親 社長さんが約束したじゃないですか!

社長 私が……?! 私は金貸しですよ。利息だけでいいなんて言う金貸しがいたら会って

みたいもんです。

母親 そんな……!

社長 だから、娘を奉公にだしや、この先借金の心配もいらねえだろ。

少女 嫌よ……! わたしどこにも行かないから……。

母親 奉公って、娘をどうする気なんです?

社長 どうにもしないさ……。 (女衛に。) 旦那、旦那から説明してやっておくんないさ。

女衛 へい……。奥さん、何も心配することはないんだ。娘さんには、然る大金持ちの身

の回りの世話をしてもらえればそれだけでいいんだ……。

母親 身の回りの世話ですか……。

女衛 そうだよ。その旦那って言うのは、大きな商売をされてたいそう立派な方だ。学費の面倒だっけ見ていいっておっしゃってる。

母親 学校に通わせてもらえるんですか?!

女衛 ああ、それだけじゃない……。毎日いい服を着て、いいもん食べて。お給金だっけ

たいそういららしい……。三年も奉公すりゃ、借金返しておつりが来るってもんだ。娘

さんにとつちや、こんないい話はないだろ……。

少女 お母さん、どこにも行きたくないよ。ずっとお母さんのそばがいい……。

母親 でも、学校に行けるんだよ。進学したいんだろ……?!

少女 お母さん……。

社長 さて、話は決まりのようだな。さっそくだが……。

セールスマン そんな話があるんでしょうか?!

社長 何だと?!

セールスマン だから、そんな都合のいい話があるのかって言うてるんです……。
社長 それがあるんだなあ……。世の中にはそういったいい話もあるものさ。

セールスマン でも……。

母親 いいんです……！旦那さん、もういいんです。

セールスマン 奥さん……。

母親 いいんです、学校に行かせてもらえるなら……。もうそれで充分です。わたしには娘にしてやれることは何もありませんから……。ですからこれでいいんです！

セールスマン いけません！考え直してください……。この人たちは、娘さんをその金持ちとやらの囲われ者にしようとしてるんですよ。身の回りの世話だけなんて嘘です！

母親 囲われ者……？

セールスマン ええ、愛人にしようとしてるんです。だいたいその話だって本当かどうか。どこかの女郎屋に売り飛ばす気かもしれません。

手下 てめえ、知った風な口利いてんじゃねえぞ！うちの社長が嘘をつく訳ねえだろ！

女衛 そうですよ、奥さん。あつしたちは嘘なんか言っちゃいません……。その金持ちの旦那って言うのは、昨年事故で娘さんを亡くされてね、たいそう気落ちされてたそうなんです。そこで、身の回りの世話に亡くなられた娘さんと歳の近い子を置けば旦那の気も晴れるだろうってことで、あつしに話が来たわけで……。まあどこかに適当な娘はいないかと社長に相談したところ、いるって言うじゃありませんか。そんなことで、奥さんの娘さんにかかって言う話なんです。

母親 じゃ本当の話なんですか？娘を女郎屋に売ったりしませんね？

社長 ああ、そんなことはしない。安心して私たちに任せなさい。

セールスマン ダメです……。そんな言葉に騙されてはいけません！

社長 あんた、さつきから度々口を挟んでくるが、今さら父親ぶる気かい……。？それはちよつと虫が良すぎやしませんか。口を出すなら、ちゃんと父親の責任を果たしたらどうです……。？それができないなら黙っててもらいましょか。

セールスマン 人が騙されようとしているのに、黙ってる訳にはいきません！

社長 嘘だの騙すだの、何を根拠にそんなことを言ってるんです……？

セールスマン これでも私は世間というものを少しは知ってるつもりです。あなたたちのように、借金のかたに人を売り買ひするような人は、甘い言葉で人を騙すんです……。社長 とんだ言いがかりだな……。あんたの知ってる世間がどんなものか知らないが、私はそんな悪い人間じゃありませんよ。今度のことだって、この親子を助けたい一心で言うてるんだ。言わば人助けなんだよ！

セールスマン 人助けだなんて……。それが甘い言葉だと言ってるんです！あなたたちのような人は、損得の得しかとりません。得にもならない人助けなんてするはずがないんです……。！

社長 話の分からない人だ……。それじゃ、こうしましょう。私を信じるか、それともあ

んたを信じるか、奥さんに決めてもらいましょう・・・、どうです？

セールスマン・・・。

社長 どうしたんです？自信がないんですか・・・？

セールスマン いいえ。分かりました、それでいいでしょう。

社長 さあ奥さん、後はあんたにしたいだ・・・。私かこちらの旦那か、どちらを信用します？

母親・・・。

セールスマン 私を信じてください！この人たちの話は全部出鱈目です、信用してはいけません・・・！

少女 お母さん！お父さんを信じて。お父さんの言うことが正しいの。

母親 旦那さんはお前のお父さんじゃないのよ。私たちを幸せにはできないの・・・。社長さん、わたしは社長さんを信用します。娘をどうかよろしくお願いします。

少女 お母さんどうして・・・？どうしてお父さんを信じないの？！お父さんが可哀想じゃない・・・。

母親 旦那さん、親切にしてもらったのに、すみません。

セールスマン 考え直してもらえませんか？これじゃみすみす娘さんを不幸にするようなものです。

母親 いいえ、これであの子は幸せになれるんです！

セールスマン 奥さん・・・！

社長 これで決まりのようですね・・・。(女衛に) 旦那、お願いしますよ。

女衛 へい、お任せくださいませ・・・。

社長 (手下に。) おい、行くぞ。

手下 へい。(少女の腕を掴み、連れて行こうとする。)

少女 嫌！放して！（抵抗する。)

手下 大人しくしろい・・・！

少女 お母さん、どこにも行きたくないよ。

母親 (泣き声で。) これがお前の為なんだよ。幸せになれるんだ・・・、大人しくついて行きなさい・・・。

少女 お母さん・・・。お父さん！

セールスマン・・・。

少女、もはや抵抗することなく連れて行かれる。

セールスマン ちょっと待ってください！

社長 まだ何か用ですか？

セールスマン・・・。

社長 どうしたんです？

セールスマン ……。

社長 行くぞ。

セールスマン 待ってください！

社長 だからなんなんですか…？！

セールスマン 借金は、私が…。

社長 借金がどうしたんです…？

セールスマン 借金は私が返しますから…、その子を放してください…。

社長 今なんて言いました？！借金をあんたが…？やつとその気になったんですか…？

セールスマン ええ。

母親 やめてください旦那さん！これ以上私たちに関わらないで…。

セールスマン 借金は私が返します。何か問題ありますか？

母親 旦那さん！

セールスマン 何か問題ありますか…？

社長 そりゃ元々あんたがこさえた借金だ、あんたが返すのが筋ってもんだ…。でも、

どうして急に返す気になったんです…？

セールスマン 娘の為です。

少女 お父さん。

母親 何を言ってるんです！旦那さんは父親じゃ…。

社長 奥さん！亭主が返すって言ってるんだからそれでいいじゃないか。ただ、先方さんに

はもう話を通ってるんですよ。このままじゃこの旦那(女衛)の面子が立ちません…。

セールスマン どうすればいいんです…？

社長 それなりに上積みしていただかないと…。

セールスマン いいでしょ…。

セールスマン、上着の内ポケットから厚みのある財布を取り出し、社長に差し出す。

セールスマン これでどうですか…？

社長、セールスマンから財布を受け取り、中を確認する。

社長 あんたたいそうな金持ちじゃないか！

セールスマン かりますか？

社長 ええ、十分ですとも…。(手下に。)おい、放してやれ…。

手下、少女を開放する。少女は母親の元へ。

少女 お母さん。

社長 良かったな、いいお父さんがいて……。さあ、行くぞ！
手下、女衛 へい！

社長、手下、女衛、立ち去る。

少女 お父さん、ありがとう。やっぱりお父さんはわたしのお父さんだったのね……。

母親 (セールスマンに。) どうしてあんなことをしたんです?! もう少してこの子が幸せになれたのに……。

セールスマン 奥さん、それは……。

母親 もうわたしたちのことはほっといて……! もう、関わらないでください……。 (少女に。)

少女 さあ、行くよ。

少女 でもお父さんが。

母親 この人はお父さんじゃないの! 早く来なさい!

母親、少女の手を掴んで強引に引っ張って行く。

セールスマン ちょっと待って……。、ください……。。

セールスマン、呆然と見送る。駅長が外から帰って来る。

駅長 いやあ、お待たせしました……。どうかしましたか?

セールスマン 駅長さん……。いえ、何でもありません。

駅長 そうですか……。お客さん、うまくいきましたよ。みんな喜んでました。これで

復旧作業がはかどりそうです。

セールスマン (そっけなく。) そうですか。

駅長 どうしたんです? うれしくないんですか……?

セールスマン もういいんです……。

駅長 もういいってどういうことですか?! あなたが早く帰りたいって言うから、私だって、

こうして……。

セールスマン すみません……。でも、もういいんです。

駅長 やっぱり何かあったんですね……。? あの子ですか?

セールスマン ……。

駅長 あの子と関わたんですね……。?! 何をされたんです?

セールスマン いいえ、何も。

駅長 あなたが手を出したんですか?!

セールスマン　そ、そんなことするはずないでしょ！

駅長　分かってますよ。冗談です……。だったら何があったんです……。？

セールスマン　あの後母親が出てきたんです。母親は飲み屋の女将が呼び出したんですけど……。母親は女将に借金があつて、元々その借金というのはあの子の父親、つまり母親のご主人が作ったものらしく……。だから借金は父親が返すのが筋だつて。それは社長言う通りなんですが、私はあの子の父親ではありませんからそこは認めませんでした。でも、借金が返せないならあの子を店で働かして金持ちの愛人にするというので、つい父親だと認めてしまったんです。

駅長　相変わらずあなたの言っていることはよく分かりません……。まさか、あなたその借金の肩代わりを……？

セールスマン　えっ……。?! まあ。

駅長　何てことを……。! あれほど……。

セールスマン　仕方がなかったんです……。借金取りが来て、お金が返せないならあの子連れて行くつて……。あの子が売られそうになったんです……。!

駅長　そんなものはほつておけば良かったんです。

セールスマン　見て見ぬ振りなんてできませんか……。?! あの子は私のことを「お父さん。」つて呼ぶんです。「お父さん、助けて!」つて……。でもいいんです、あの子がこれで幸せになつてくれれば……。

駅長　そりゃ今頃あの親子はさぞかし幸せなことでしょう。なんせまんまとあなたから金を巻き上げたんですから……。

セールスマン　何を言つてるんです？

駅長　あなたは騙されたんですよ……!

セールスマン　そんなはずはありません……。あの借金取りは……？

駅長　そいつらはあの親子の仲間です。あの親子は仲間と一緒になつてあなたを騙したんですよ……。

セールスマン　でもあの子はどうです?! 私のことを「お父さん。」つて……。

駅長　あの娘は金の為なら誰だつて「お父さん。」つて呼びますよ。この街では札付きの不良で通つてますよ。学校にだつてろくに行つてないはずですよ……。

セールスマン　嘘です。

駅長　嘘じゃありません。あいつらはいつも悪いことを企んでるんです……。

セールスマン　嘘だ……。

駅長　お気の毒ですが、諦めなさい……。早くご家族のところに戻ることで……。

セールスマン　帰れませんよ。

駅長　どうしてです……？

セールスマン　もう、お金が無いんです。

駅長　あなたいったいいくら取られたんです……？

セールスマン 全部です。

駅長 全部?!

セールスマン はい、稼いだお金全部です。

駅長 汽車賃もないんですか?

セールスマン それくらいは残ってますが……。

駅長 だったら帰れるじゃないですか……。程無く汽車が来ます。

セールスマン 汽車が……?

駅長 復旧したんですよ、ですからもう間もなく汽車が来るはずですよ……。それに乗ってご家族のところへお帰りなさい……。

セールスマン 帰れません。帰れる訳がありません……!妻や子供は私の持って帰ってお金を待っているんです。なのに、手ぶらで帰れる訳がないでしょう……。

駅長 それはどうでしょうか……。お金が無くても、あなたが帰って来るだけでご家族は喜ぶんじゃないですか?

セールスマン 現実はそのなにごくありませんよ。恐らく妻は、私がお金を持ってないと知ったら家にも入れてくれないでしょう。「何しに帰ってきたの?お金を稼いでくるまで帰ってこないで!」……。冷たい声で追い出されるに決まっています。

駅長 奥さんはそんなに……?

セールスマン 冷たい女です……。

駅長 でも、お子さんがいるじゃありませんか。あなたが帰ればきっと味方になってくれるはずですよ……。

セールスマン 十年前ならそうだったかもしれませんが……。娘が四五歳の頃は、私が仕事に出るときはいつも、「お父さん早く帰って来てね。」って見送ってくれたものです。それが近ごろじゃ、目を合わせてくれません……。現実はこの様なものです。

駅長 だったらどうしてそんな簡単に金を出してしまっただんです?!忠告したはずですよ、この街には悪い奴らもいるから気を付けるように……。

セールスマン ええ、でも簡単にお金を出したわけじゃありません。あの親子と接してるうちに、彼女たちが私の家族だったら……。私のことを「お父さん。」って慕ってくれる娘が借金のかたに売られそうになったんです。父親ならどんなことをしたって助けてやりたいって……!

駅長 あなたは父親じゃない……。そんな風に思わせるのが奴らの手なんです……。

セールスマン、力なくベンチに座る。

駅長 とにかく、家族のところへお帰りなさい。あなたが思ってる程、奥さんも娘さんも冷たくありませんよ。きつと温かく迎えてくれるはずですよ。

セールスマン そうでしょうか?

駅長 ええ、きつとそうです……。汽車が来たら、それに乗るんですよ。分かりましたね?!
セールスマン はい…………。

駅長、駅舎の奥へ立ち去る。

セールスマン、一人ベンチを立ったり座ったり、あちこち歩き回ったり落ち着かない様子。ふと、人の来る気配に気づきベンチに戻る。

再び、女将登場。

女将 旦那、まだいらしたんですね。良かった。

セールスマン 女将…………。

女将 これ。(お金を差し出す。)

セールスマン これは?

女将 旦那から頂いたものですよ…………。

セールスマン どうして私に?

女将 やっぱり旦那から頂く筋合いのものじゃありませんから…………。

セールスマン 女将はあいつらの仲間じゃないのか?

女将 仲間って、いったい何のことです?

セールスマン とぼけるんじゃないよ!皆で寄ってたかって私を騙したくせに。

女将 あたしが旦那を騙した?!冗談じゃありませんよ!いったい誰がそんなことを言ったんです…………?

セールスマン ああ…………、駅長さんから聞いたんだけど。女将もあの親子も借金取りも、皆グルだって…………。

女将 あたしをあんな奴らと一緒にしないでくださいな…………。駅長の奴、いい加減なことを。

セールスマン 駅長さんはいい加減な人じゃない…………!ついさっきまで、私の為に走り回ってくれてたんだから。

女将 ええっ!そんなの嘘ですよ。

セールスマン 嘘じゃない、本当のことだ。

女将 駅長なら、ついさっきまでうちの店で遊んでましたよ…………。

セールスマン 駅長さんが…………まさか…………。

女将 まあ、信じようが信じまいが旦那の勝手ですがね…………。でも、これだけは受け取ってくださいよ、あたしの気が済みませんから。

セールスマン ……………。

女将 困ってるんでしょ?あいつらに有り金全部巻き上げられて。

セールスマン えっ?!ああ…………、まあ…………。

女将 だったら、さあ…………。これは元々旦那のお金なんですから…………。

セールスマン すまない、ありがとう。

女将 礼なんてよしてくださいよ。元々旦那のものだと言ってあるじゃありませんか……。

セールスマン 女将はいい人だったんだな。申し訳ない、疑うようなことを言って……。

女将 いいんですよ、そんなこと……。それにあたしはいい人でも何でもありませんから。

セールスマン いや、女将はいい人だ。

女将 そんなことありませんって……。世間じゃあたしは、店の子たちに無理やり客を取らせて、金もうけしてる悪い女で通ってるんですから……。

セールスマン でも、事実なのか……。？女将がそんなことをするとは……。

女将 店の子がお客を取っているのは事実です。でも、無理にやらせてる訳じゃありません。

みんな親思いのいい子たちなんです……。でも、家が貧乏でねえ、ろくに学校も出ちゃいない……。手っ取り早く稼ぐにはこんな方法しかないんですよ。店で出せる給金なんてたかがしれていますから……。あたしが辞めろって言ったって、陰でこそそそやるに

決まっています。どうせなら、あたしが間に入ってあの子たちを守ってやった方がいいじゃありませんか、中には質の悪い客だっていますから……。

セールスマン 女将はいい人だよ、本当は。

女将 やめてくださいよ。あたしがいい人だったら、世の中いい人だらけじゃないですか……。それより旦那……。うちの店に来てくださいな、あたしがお相手しますから……。

(セールスマンの手を取る。)

セールスマン いや、でも……。もうすぐ汽車が来るかもしれないし。

女将 まだ来ませんよ。

セールスマン でも駅長さんが……。

女将 駅長の言うことなんか当てになりませんよ……。ねえ、旦那……。

セールスマン風の男に登場。手には大きなトランク。

男2 (セールスマンと女将に近づき。) 雨がやんで良かったですなあ……。

女将 それじゃ、あたしはこれで……。

女将、ベンチから腰を上げる。

男2 お邪魔でしたか？

女将 いいえ、そんなんじゃないからお気遣いなく。じゃ旦那、お元気で……。

女将、立ち去る。

セールスマン あっ、女将……。

男2 何だか邪魔したようで、へへへ。

セールスマン いいんです、そんなんじゃありませんから……。

男2 でも、結構いい女でしたね……。

セールスマン そうでしょうか？

男2 そうですよ……。でも、あの女には気を付けた方がいいですよ。

セールスマン 女将を知ってるんですか？

男2 そういう訳じゃありませんけど……、あの手の商売女は金のことしか考えてませんから。

セールスマン 女将はそんな人じゃありませんよ……。

男2 どうですかねえ……。私が声をかけなきゃ、今頃あなたあの女のカモにされてたかもしれないんですよ……。

セールスマン そんな心配はいりません。あの人はそんな人じゃありませんから……。

男2 あの女に惚れてたんですね。まあ、いい女でしたから……。へへへ。

セールスマン (大きな声で。) そんなんじゃありませんよ！

男2 ああ、ビックリした！そんなに怒らないでくださいよ……。いいじゃないですか、

男と女なんですから。

セールスマン だから……！

男2 汽車が来るって聞いたんですが、それは確かですか？

セールスマン ……。

男2 怒ってるんですか……？

セールスマン 確かなようです。

男2 本当ですか？！助かった……。ホッとしました。(セールスマンの座る横を指して。)

ここ、よろしいですか？

セールスマン ……。

男2 どうもすみませんねえ……。 (セールスマンの横に座る。)

セールスマン まだ何も言ってますんけど。

男2 いいじゃないですか、横に座るくらい……。それともこのベンチはあなた専用ですか？

セールスマン ベンチなら他にもあるじゃないですか。

男2 私はここがいいんです。

間。

男2 どちらまで？

セールスマン ……。

男2 どちらまで？

セールスマン 話しかけないでください！

男2 あなたに話しかけないで誰と話せて言うんです？ここにはあなたと私しかいないんですよ。

セールスマン そんなことは知りません……。

男2 冷たい人だなあ……。袖すりあうも多少の縁って言うじゃありませんか。ここはひとつ仲良くしませんか……？

セールスマン あなたと袖を擦りあった覚えはありませんから……。

男2 さっきのことなら謝ります。この通り……！（頭を深々と下げる。）

セールスマン さっきの事と言うのはどの事です？

男2 えっ……？

セールスマン 女将さんのことですか？ベンチのことですか？

男2 あっ……、両方です。両方謝ります。この通り……！（頭を深々と下げる。）

セールスマン もういいですから……。

男2 許してもらえますか？

セールスマン ええ……。

男2 それで、どちらまで……？

セールスマン 東京まで、ちよつと。

男2 東京ですか……。お仕事で？

セールスマン いいえ、帰るんです。

男2 東京の方ですか、どうりで垢抜けしたいいい感じの人だと思いましたよ……。

セールスマン そんなお世辞はよしてください。

男2 お世辞だなんてとんでもない……！私なんか何処からどう見たって田舎者で、へへ。

セールスマン ……。

男2 お仕事は……？何をされてるんです？

セールスマン ……。

男2 あっ、いいんです、いいんです、言いたくなければ……。

セールスマン セールスの方をちよつと。

男2 奇遇ですなあ、奇遇です……。

セールスマン じゃ、あなたも？

男2 はい、私もセールスの方をちよつと、へへへ……。それで、ブツは……？

セールスマン ブツ……？と言うと？

男2 ブツと言えばブツじゃないですか。あなた、セールスマンなのにブツが分からないんですか……？

セールスマン いや、そんなことは……。分かります。当り前じゃないですか……。

男2 だったら、勿体ぶらないで教えてくださいよ。

セールスマン ……。

男2 企業秘密ですか？

セールスマン ええ、まあ……、そんなところです。

男2 用心深い人だなあ……。まあいいでしょ。私には企業秘密なんてものはないんで……。

私のブツは教材です。

セールスマン 教材？

男2 はい、英語の教材が私のブツで……。

セールスマン そういうことでしたか。

男2 どういうことですか……？

セールスマン いえ、何でもありません……。それでその英語の教材と言うのは、どうい

ったものなんです……？

男2 へへへへ、それは秘密です。

セールスマン 企業秘密はないって……！

男2 ありませんよ……。だって、不公平じゃありませんか……。先にあなたを教えてくださいよ……。

セールスマン 私のは、タイプライターです。

男2 ほう！また洒落た物ですなあ……。さすが、東京の方はブツも都会的だあ……。

セールスマン そんなことはありません、全くですから……。

男2 全く、とは……？

セールスマン 売れないんです……。

男2 まあ、タイプライターって言うのは、そもそも英語が分かってないと扱えない代物ですからなあ……。私のブツが売れば、そのうちあなたのブツだって売れますよ。そう

気落ちしなさんな。晴れた日もあれば、雨の日もある、それがセールスのお仕事です……。

ちなみに私は最近晴天続きで、へへへへ……。

セールスマン 英語の教材と言うのはそんなに売れるものなんですか……？

男2 (辺りを見回し、小声で。) まあ、そこそこ。

セールスマン (つられて、小声で。) 急にどうしたんです？

男2 (小声で。) 思い出したんですよ。

セールスマン (小声で。) 何を思い出したんです？

男2 (小声で。) 例の強盗のことです。

セールスマン (小声で。) 強盗……？

男2 (大声で。) 知らないんですか?!

セールスマン (驚いて。) な、何ですか?!

男2 私たちのようなセールスマンばかりを狙う強盗のことですよ。

セールスマン そのことでしたら、この駅長さんに聞きましたよ。何やら近くの町でセールスマンが強盗に殺されたそうで……。

男2 この辺りだけじゃないんです。あちこちでやられてるそうなんですよ……。私たちの話も何処で聞かれていますか分かります、気を付けなと……。

セールスマン ええ。でも特にあなたは気を付けなと……。大金を持つてるんですよ……？

男2 ええ……。まあ……。

セールスマン ここは駅なのに人があまり来ないようですね……。強盗が狙うにはうってつけの場所じゃないですか。

男2 驚かさなでください……。！

セールスマン 心配はいりません、私が一緒にいるじゃないですか。強盗だって、二対一じゃ敵わないでしょ。

男2 それは心強い……。でも、強盗は一人なんでしょうか？

セールスマン えつ……。？

男2 二人だったらどうするんです？あなたといても相手が二人なら敵いません。

セールスマン その時は……。そうだ！駅長さん呼びましょう。それなら三対二で強盗は敵いませんよ。

男2 それなら安心です。ホッとしました……。でもちょっと待ってください、強盗が三人だったら……。？駅長さん呼んでも敵わないじゃないですか……。

セールスマン それなら……。あつ、女将を呼んだらどうでしょ？

男2 女じゃないですか！

セールスマン 大丈夫、女将は女でも強そうですから。それなら四対三で強盗は敵いません。

男2 でも、強盗が四人だったら……。

セールスマン いい加減にしてください！そんなこと言ったら、何人いたって強盗には敵わないじゃないですか。

男2 すみません。私はこう見えて、人一倍怖がり屋なんです……。まだ汽車は来ないんでしょうか……？

セールスマン どうでしょう、駅長さんは間もなくって言ってたんですけど……。もう一度駅長さんに聞いてみましょうか？

男2 いいえ、構いませんからここにいてください。お願いですから、私を一人にしないでください！

男、セールスマンにすがりつく。

セールスマン えつ……。！ちよつと、分かりました、分かりましたから……。

男2 (セールスマンから離れて。)すみません……。あなたは怖くないんですか？

セールスマン 怖いに決まってるじゃないですか。私だって殺されたくはありませんから……。でも、私が狙われることはないでしょう……。

男2 どうしてそうだといい切れるんです？

セールスマン 私はたいしてお金を持ってませんから……。

男2 強盗には金を持っているかどうかなんて分かりませんよ。

セールスマン 強盗だって馬鹿じゃないでしょう。危険を冒すからには、ちゃんと下調べをするんじゃないでしょうか。

男2 下調べを……？

セールスマン 私が強盗だったら、闇雲に人を襲ったりしませんよ。確実にお金を持つてる人を狙います……。

男2 私は大金を持っています。どこかで狙っているんでしょうか？

セールスマン あなた、お金のことを誰かに話しましたか？

男2 いいえ、誰にも……、あなた以外には……。

セールスマン これからお帰りですか？

男2 ええ、まあ……。

男2、キョロキョロ辺りを見回す。

セールスマン 気になりますか？

男2 ああ、すみません……。

セールスマン お金のことを誰にも話していないなら大丈夫ですよ、狙われる心配はありません。

男2 そうでしょうか……？

セールスマン ええ。あなたのことを見ただけで、大金を持つてるなんて強盗には分かりませんから……。

男2 そうですね、あなたの言う通りです。

セールスマン ええ……。

男2 東京には家族が……？

セールスマン ええ、妻と娘が……。でも、稼ぎがありませんから……、どうにも帰り辛くて……。あなた、ご家族は……？

男2 今はいません……。

セールスマン 今はと言うと……？

男2 実は私、家族を置いて家を出たまま、もう何年も帰っていません。

セールスマン どうして？また……。

男2 結構な額の借金を作ってしまったしね……。家を出て、借金取りから逃げたんですよ……。女房と娘は、さぞかし私のことを恨んでるだろうなあ……。

セールスマン 帰ってあげないんですか？

男2 それがどうにも、帰り辛くて……、へへへへへ。

セールスマン 笑い事じゃないでしょ……！奥さんと娘さんが、どんなつらい目に遭って
るか考えてみてください……。

男2 説教ですか？やめてくださいよ……。私だって分別のある大人です……。何度も
帰ろうとしたんですよ、何度も……。でも帰れなかった……。あなただって稼ぎが
なくて帰り辛いんでしょう？もしかして、「このまま逃げてしまおうか。」なんて考えてたり
して……。

セールスマン 何を言ってるんです、私はそんなこと……。

男2 凶星ですか？

セールスマン ……。

男2 へへへへ、いいじゃないですか。あなたが逃げてしまいたいって考えるのも無理は
ありません。それが人間ってもんです……。

セールスマン 私は逃げたりしない！

男2 それはどうだか……。

セールスマン あなたとは違います……。逃げたりはしません。

男2 御立派なこと……。ただ、あなたこのまま家に帰ったところで、女房と娘にの
しられるだけじゃないんですか？それどころか、家に入れてもらえるかどうか……。

セールスマン 誰がこのまま帰るって言いました……？

男2 まさか、またセールスに……。稼ぐ自信あるのかい？

セールスマン もうセールスはしません。

男2 でしょうね……。だったらどうやって稼ぐんです……？

セールスマン、ベンチから立ち上がり、ベンチの周りをゆっくりと回りだす。

男2、セールスマンの動きを目で追う。

セールスマン 心配はいりません、お金はあります。

男2 でもあなた、稼ぎがないって……。

セールスマン ええ、もちろん私にはありません。でも……、あなたが持つてるじゃあり
ませんか……。

男2 あんた、何を言ってるんだ……？

セールスマン 稼いだお金を何に使うつもりです？

男2 そんなことあなたに関係ないでしょ……。

セールスマン どうせ、酒、女、賭博、そんなところでしょう。

男2 私が稼いだ金なんだから、どう使おうと……。

セールスマン どう使おうとあなたの勝手です……。奥さんに渡してあげないんですか？

男2 今更どうして……。心配いりません、あの女はしたたかですからね、きっと男を
手玉に取って悠々と生きてますよ……。

セールスマン そうですか……。私の妻は違います……。私がお金を持って帰ってやらないと、妻も子供も生きてはいけません。どうせ詰まらないことに使うくらいなら、あなたが持っているお金、全部私によこさない。

男心 あんた……。

セールスマン ここは本当に、駅なのに人が誰も来ないところです……。うってつけじゃありませんか、そう思いませんか？

男心 あんた、まさか……。

セールスマン まさか、何です……？

男心 強盗……？

セールスマン 強盗？私が……？そんな風に見えますか？

男心 いいえ。

セールスマン (笑顔)……。。

男心 何だ……。冗談はよしてくださいよ。人一倍怖がりだって知ってるくせに、人が悪すぎますよ……。

セールスマン、男心の背後で立ち止まり、男心が安心してある隙に上着のポケットから紐のようなものを取り出し、素早く男心の首に巻きつける。

セールスマン (紐を一気に締め上げて。)冗談なんかじゃありません。お金は全部頂きます……。

男心、息絶える。

セールスマン、男心の浮気のポケットから分厚い財布を抜き取り、自分の荷物を持って駅から立ち去ろうとする。

駅長、登場。

駅長 お客さん！どうしたんです？！

セールスマン、立ち止まる。

駅長 汽車に乗らないんですか？

セールスマン ええ、乗りません。

駅長 やはり家には帰らないんですね……。

セールスマン いいえ、帰ろうと思います。

駅長 だったら汽車にお乗りなさい。

セールスマン ……。

駅長 あんた、そんな恰好で街をうろついてたら、すぐに捕まってしまうよ……。汽車に乗ったらどうだい？ただし、汽車賃は少々高くつくがね……。さあ、どうする……？

セールスマン いくらだ……？

駅長 半分頂こうか。

セールスマン 足元を見るじゃないか……。それじゃ合わない、殺ったのは私だから……。

(奪った財布から幾ばくかの札を差し出して。) これでどうだ……。？

駅長 (受け取った札の枚数を数えて。) まあ、いいだろ……。行けよ……。

セールスマン、改札の方へ行こうとする。

駅長 おい！(セールスマン、立ち止まる。) いい人面しやがって、とんだ悪党だな……。セールスマン あんたもな……。

セールスマン、立ち去る。少し遅れて、駅長も改札の奥へ消える。

待合室には、ベンチに息絶えた男2だけ。まるで眠っている様。

そこへ少女、再び登場。

少女、ゆっくと男2に近づく。

少女 お父さん……。お父さん、寝てるの……。？

少女、周囲を見回し警戒しながら、男2の上着の内ポケットに手を入れようとする。その瞬間男2が倒れ、ベンチに横たわる。

少女 ワツ……。！

少女、腰が抜けて立ち上がれない。

少女の母親、登場。

母親 あんた何やってんだよ……。？！

少女 母ちゃん……。この人、死んでる……。

母親 (男2をチラッと見て。) さあ、行くよ。

少女 でもこの人……。

母親 死人に関わったって一銭にもなりやしななんだ……。ほら、行くよ。

少女 母ちゃん……。(立てない。)

母親 仕方ないね……。

母親、少女の手を掴んで立たせる。

少女 この人、何で死んだんだろ？

母親 そんなことはどうだっていいんだよ！いつまでもこんなところにいたら、変なことに巻き込まれちゃうじゃないか……。

母親、もう一度男2の方を見る。

母親は何かを感じた様で、男2に近づき恐る恐る顔を覗き込む。

少女 どうしたの……？何？

母親 あんた……？！

少女 知ってる人？

母親 いいや、知らない人。さあ、行くよ！

母親、さっさと一人で行こうとするが、少女は動かない。

母親 何してんのさ！早くおいで……！

少女 この人誰……？知ってるんでしょ？

母親 知らないって言うてるじゃないか……！

少女 お父ちゃん……？

母親 何言ってるんだい、そんな死人がお父ちゃんな訳ないだろ……。あいつは殺したって死なないような男なんだ……。

少女、男2の体に花を近づけ匂いを嗅ぐ。

少女 お父ちゃんの匂いがする……。お父ちゃんだ！母ちゃん、この人お父ちゃんだよ……。

お父ちゃん……！

少女、男2にすがりつく。

母親、少女のもとに駆け寄り、肩を掴んで男2から引き離そうとする。

母親 やめなっば！

少女 何するんだよ？！

母親 もう死んじゃってるじゃないか……！

少女 死んだって、お父ちゃんはお父ちゃんだろ？！母ちゃん……。

少女、再び男2にすがりつき、泣き崩れる。

母親 どうして今さら帰ってきたんだろねえ……？

駅舎の奥から声。

声 間もなく列車が参りまあす。間もなく列車が参りまあす。列車が参りまあす……。
少女 お父ちゃん……！お父ちゃん！お父ちゃん！……。

ゆっくりと暗くなる。

終わり。